

### C. 七尾城跡周辺の模式地質構造

上記した飛騨片麻岩類～城山礫岩層の大地の変化した関係を第26図に示す。

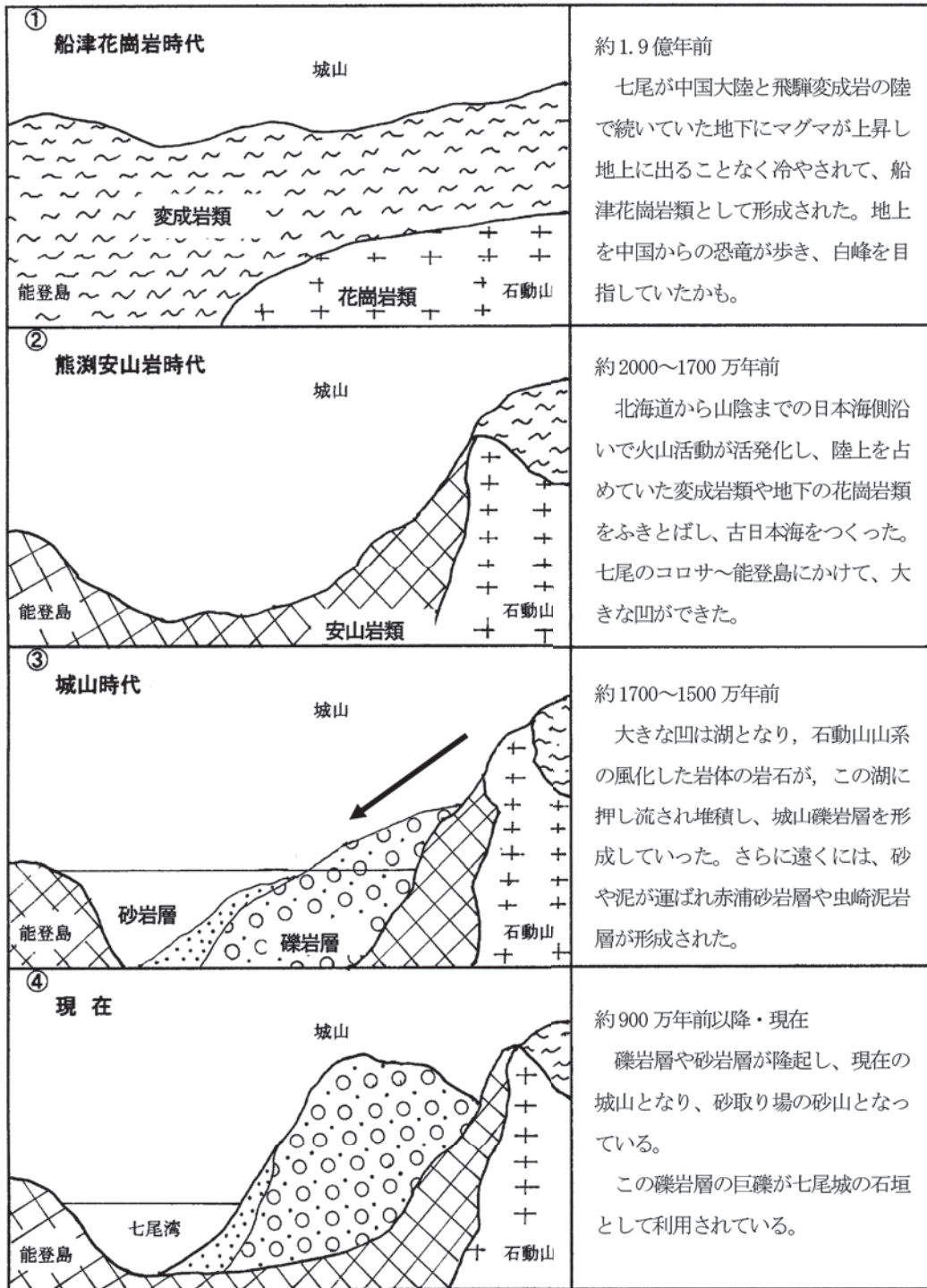


図26 能登島～城山～石動山の大地変化の模式断面図

#### 引用文献

- 紮野義夫編1965『能登半島の地質』「能登半島学術調査書」石川県 P. 1-84.  
 紮野義夫編1993『新版・石川県地質図(10万分の1)・石川県地質誌』石川県 318pp.  
 野村正純1996『七尾市自然環境調査報告書』「地質・化石」七尾市 P. 1-34  
 野村正純2001『17. 七尾周辺一地層と化石— 北陸の自然をたずねて』  
 北陸の自然をたずねて編集委員会〔新改訂〕日曜の地学6 築地書館 P. 119-125.

#### 4 地 形

城山を取り巻く大谷川やその支流の鍛冶屋川、木落川、庄津川から谷(沢)を麓から歩くと、いずれもはじめの出合いは巨礫も少なく流れも緩やかな小規模扇状地であるが、徐々に巨岩、巨石(1m以上)が見られるようになる。山頂部近くの最後の大きな出合いを過ぎると、谷は急傾斜となり滝などが現れる。本丸駐車場・寺屋敷の北側、樋の水東側の木落川が流れる落ヶ谷では、善谷との分岐を過ぎると傾斜が強くなる。

また、それぞれの尾根には、人為的に作った切岸も見られるものの、大手道の七曲に代表されるように中腹は急峻な痩せ尾根となっている。



滝ヶ谷内(鍛冶屋川)の滝



落ヶ谷の滝(不動滝)



木落川上流



大谷川上流

城山を起点に流れる大谷川の川底やその支流となる庄津川、木落川、鍛冶屋川の谷では、城山礫岩層の露頭を見ることができる（3地質46頁～49頁を参照）。

### 本丸跡北側斜面の崩落

(2007. 7. 10)

砂礫層の下から滲み出た水により  
シルト（粘土）層が光って見える。



### 樋の水周辺遊歩道東側の崩落

(徐々に自然崩落が進行)  
遊歩道の下は大きく崩落している。



## 5 近年の崩落の特徴

七尾城跡の城域は、「城山礫岩層」と総称される砂礫を多く含む地質であることから、各所で頻繁に崩落を繰り返してきた。その傾向としては、冬期の積雪と夏季の豪雨を原因として多く発生している。

春先には、繰り返す雪解けによって水が山肌の割れ目に入り、樹木の重みに耐えかねて根こそぎ崩落したり、森林の荒廃に伴いフジなどのつる性植物が蔓延り、樹木に積もった雪の重みに耐えかねて数本が一緒に倒木する状況がある。また、昨今は、梅雨や台風時期に限らず集中豪雨がよく起きている。突然の豪雨は、保水や排水の能力を超えて一か所の低いところに流れが集中して、大きく地形を削り、押し流している。それが度重なることによりさらに弱体化して被害を拡大している状況が多く見られる。さらに、近年のイノシシによる地形被害も自然災害の拡大に影響を及ぼしており、こうした近年の状況は、今後の保存と活用に大きな影響を与える要因と考えられる。

### 豪雨災害の状況（平成19年（2007）7月10日発生）



桜馬場南側石垣（A0403）



遊歩道（樋の水北側）



桜馬場北側斜面



九尺石南西斜面

## 第2項 七尾城に関する言い伝え

七尾城に関する言い傳えの採集は、聞き取りの他に市史、郡誌、サークル活動等の各種刊行物からのものを合わせると200話近くになった。これらは七尾城周辺だけでなく、富山県氷見市を含む能登地域一帯に広く語り継がれてきたものだが、上杉謙信の越後勢が能登一帯に展開した事跡を伝えているのであろう。

### 1 言い伝えを分類

#### (1) 時系列的分類

収集した言い傳えを時系列的に大まかに分類した。もとよりこれらは確たる史料ではなく、その内容も時期的に前後したものが混ざっているなど厳密な分類は困難であったが、大まかに以下のように分類を試みた。

A 畠山の殿様	B 七尾城の構え	C 重臣の内乱
D 謙信の能登攻め	E 上杉の能登支配	F 前田利家七尾城入城

#### (2) 地域別分類

時系列に分類したものを更に地域(校区)別に細分類した。この作業から、越後の侵攻軍はおおまかに3方面から七尾城へ侵攻したのではないかと思えてきた。すなわち、一隊は珠洲に上陸して奥能登を平定しながら南下して七尾城へ、一隊は氷見や灘浦方面から七尾城の搦手へ、今一つは津幡から羽咋、志賀町を經由して七尾城へ、である。この津幡から北上したのが本隊でなかろうか。

## 2 越後勢、能登に侵攻

言い傳えの中でも、先のDに分類した「謙信の能登攻め」話に人々は膝を乗り出して聞き入ったことであろう。

謙信の侵攻に住民がおびえ、身を隠したという話や、勇敢にも抵抗をしたという話が各地に見える。それらの話をたくさん紹介したいのだが、本書は七尾城跡の保存活用を主目的としていることから、ここでは旧七尾市地域の伝承地と語り傳えのタイトル名に限って掲載した。他地域での伝承話は文中に適宜紹介する。

#### (1) 謙信、3方面から七尾城に迫る

奥能登に侵攻してきた珠洲方面からの一部隊が名舟に上陸、旧柳田村の五十里(いかり)城を陥落させる。この部隊は珠洲地域を平定して進軍してきた主力部隊と合流し、宇出津の棚木城を攻める。この城にも「米流し坂」から米を流して城中に水があるかのように見せかけて応戦するも策がばれ、ついに落城したという話が伝わっている。この後、奥能登方面隊は、長氏の守る穴水城を平定して南下、七尾城へと至る。

灘浦方面からの侵攻軍は、氷見の飯久保(いくぼ)城を攻めたが容易に落とせず、布勢

水海（ふせのみずうみ）の水を放流して落城させたという。この他にも氷見には侵攻にかかわる言い伝えが沢山ある。この後、越後勢は七尾の灘浦地域に展開していく。

津幡・羽咋・志賀町の本隊と目されるコースには、謙信の猛攻で最期を遂げた武士たちを弔ったと言い伝える地蔵が良く見られる。いよいよ謙信は七尾城を目前にして温井氏が守る高階地区の館山を攻める。「小さな山だから簡単に落とせる」と踏んだが、思わぬ伏兵に出会う。越後勢はこの辺りの水田が深田であることを知らず、立ち往生したところを狙い撃ちされ、退却を余儀なくされたという。

●1の「深田に足を取られた謙信」である。



●1【深田に足を取られた謙信】  
（奥の森は●13【温井氏館跡】）

### （2）上杉勢の略奪、拉致

住民は上杉勢の能登攻めを知ると、略奪と拉致におびえて右往左往したことであろう。金目の物を奪われないように溜め池や土中に隠した、という話が多い。

●33の「黄金の神輿」は、奪われるくらいならいっそその池に埋めようと黄金の神輿を沈めた、という話である。

●36の「底なしの池」は付近の底なしの池に寺の釣鐘を放り込んで隠したという。他にも、甕に銭を入れて埋めた、という話は各地で見られる。

侵攻軍は金目の略奪は無論だが、これに拉致も加わる。人々は拉致を恐れて山中の洞穴などに隠れた。この話は能登全域に広く分布している。捕まっては大変と隠れたのであろう。



●36【底なしの池】

戦国時代は度重なる合戦で多くの戦死者が出、兵士はもちろん、後方支援や新田開発などでも人手不足が生じた。そこで戦国大名は侵攻先で拉致をおこない、新田開発での使役や人身売買にも使った、という。直江津に、能登島の小浦村（今は無住）の住民が移住し塩作りに従事した、と書かれた石碑が今も建っている。これは、江戸初期のこととされているが・・・。

上杉は人質（拉致など）の返還という名目で他の戦国武将よりも安値で渡した、という（『上越市史』）。陣の穴、城穴、隠れ穴、千人窟などと呼ぶ穴に隠れたという話が全域に見られるのはあながちデタラメでなく、事実だったのだろう。

### （3）抵抗する住民たち

この大騒動に、能登の人々は畠山の殿様を擁護する立場をとる。攻め来る上杉勢を追い払うべく、つわものが大活躍する話はいくつもあつた。いずれも、こんな怪力のいる村には怖くて入れないと退散していく話である。

氷見・灘浦方面からの敵に対しての抵抗例がある。●3の「惣左エ門ににらまれた謙信」は、富山湾から七尾の崎山半島に向かってくる上杉勢に、直径8寸の大竹を手で揉みひねっ

て「さあ、来い！」と鉢巻きにして対峙した男の話である。次に●5「一斗臼の水」は、喉の渇きを覚えた謙信が百姓の家に入って水を所望したところ、1斗臼に満々と水を入れて差し出した、という怪力男の話である。いずれも上杉勢は顔を青ざめて逃げ去ったという。

志賀町方面には、「力持ち久保兵衛」という話が伝わる。上杉勢が釣鐘を持ち去ろうとしているところに年寄りの久保兵衛が遭遇する。老人は体格が良かったので、お前は力持ちのようだが、この釣鐘を持ち上げてみろ、と言われる。老人は、俺は村で一番弱いのだが、強い者はみんな逃げて行ってしもうた、と言いながら、釣鐘をぼーんと投げ飛ばした。釣鐘は村境まで飛んで行った。上杉勢は、一番弱い者がこんな怪力なら、強い者は本当にどれだけ強いか分からん、と逃げ去ったという。

また奥能登方面には、旧内浦町に「こびき坊様」が伝わる。お寺に、飯を炊いて食わせろ、と上杉勢がやってきた。坊様は、孟宗竹の輪切りでも食わしてやれと、竹やぶへ行き、手で竹をバチバチと割った。この様を見た上杉勢は驚いて、奪ってきた財宝を放り出して逃げ去った、という話である。

こうした怪力話は、あちこちに見られるが、怪力の者だけが抵抗したのではない。無力の老婆が頓智で追い払ったという話もある。

上杉勢に道を尋ねられた老婆が、「あんたらちゃ、そこに行くのなら七日坂と言うて、七日かからな行かれん坂があるげんぞ」、と応えたら、そりゃ困る、と言って引き返したという。他に「二十日坂」という話もある。いずれも輪島市での言い伝えである。

実際は恐怖でこうした行動が取れたとは思えないが、住民の心情を伝える話であろう。

### 3 七尾城落城

#### (1) 白米城伝説

全国の落城した城には必ずと言っていいほど「白米城伝説」がある。この七尾城も例外ではなく、いくつもの話が伝わっているが●17の「戻り橋」はその代表であろう。すなわち、越後勢に取り囲まれた七尾城は、白米を流して城中にたくさんの水があるかのように見せかけた。もう落ちるかと思っていた謙信は、山から滝のように水が流れ落ちるのを見て「まだ、だめか」と攻めるのをあきらめ、一旦越後に引き揚げることにした。ところがこの橋まで来た時、川にカラスが群がったのを見て、「一杯食わされた」と気づき、軍を戻した、という話である。

今も、この橋は「戻り橋」と呼ばれており、多くの市民になじみがある。

七尾城攻めに関わる白米城伝説は七尾市の東湊・南大呑地区、旧中島町、旧能都町、輪島市にも分布している。●20の「片目のスズメ」は、川に水が流れていると見せかけたのに、たくさんのスズメが米をついばみ出したため露見した。村人は「にくいスズメめ！」と石を投げつけるとスズメに当たった。それからと言うもの、お城の周りのスズメはどれもが片目が不自由になった、という話である。



●17 伝【戻り橋】

また、●19の「子守り唄落城」は、攻めあぐねていた越後勢が、子守女の「お城の滝は白米や。お城の滝は白米や。」と唄う子守唄から城中には水が無いことを知り、落城させたという話である。同様に●18の「馬洗い」は、七尾城への水脈を切つてずいぶん経つのに落城しない。どうしてだろうか、不思議だなと、探りを入れようと進むと川で馬を洗う者がおり、(これじゃ、まだだな)と思った時、鳥が飛んできて水をついばみだしたことからくりが露見した、という話である。

このスズメやカラスは、内応をした者がいてそのため落城したという意味合いがあるのだろうか。

## (2) 落城悲話

越後勢の刃にかかったり、略奪や拉致されたりと言うのは悲惨だが、それが味方の武士や農民から受けたとなるとそれ以上に残酷である。家臣に付き添われて落ち延びる奥方や姫君の財宝を奪ったといった類の話が、七尾城近隣にいくつか見える。

●26の「開かずの蔵」は、逃げる奥方を殺害して財宝を奪い、それを土蔵に隠したものの人目を気にして以後決して開けられることがなかった、という話である。このほか、●22の「血の池」は、無事に避難させた姫君を後年殺害して財を奪った者の話である。この者の家では、元日の朝、庭の池水が赤く染まるとか、姫君が蛇の形をして時どき現れるとか言う。姫や女中たちが敵に囲まれて逃げきれず、命を落とした話も残る。●39の「おはぐろふな」は女中たちが潔く城中の池に飛び込んだ。それからというものその池には歯の黒い鮒がいる、と言う。また小雨の夜、火の玉が城山の方へ飛んで行ったとか、大晦日の晩には戦いの声が聞こえるとかいう話も伝わる。

戦さが展開された城山周辺一帯は、怨霊が留まっているのか、今も奇怪な話が伝承されている。

## 4 前田利家の入城

畠山落城以後、能登はしばし上杉の支配となるが、その後に前田が入城する。前田は、上杉に加担した畠山の旧重臣の探索を始める。旧門前町には、そこに潜んでいた遊佐氏を見つけ、遊佐父子やその部下らを召し捕り、七尾の池田館において処刑した、という話がある。

「翁新五郎館跡」がそれである。

処刑したという池田館の場所は特定されていないが、「イケダ」という俗称地がいくつか在る。ここから少し離れた惣構えの外側に▲1の「しおき田」がある。「しおき田」は「お仕置き田」であろう。ここは今も祟りを恐れて入らずの森となっており、住民は垂れて水田での農作業に邪魔になる部分以外は一木一草刈り取らない。



▲1 【しおき田】



## 5 結語

本項では紙数に限りがあるため、以下の図・表には、旧七尾市域に採集された言い伝え76話を抽出して表示してみた。

もちろん、言い伝えは確とした史料ではないが、かと言って全くのでたらめというものでもない。当時の人々の心情を伝えてきたのである。

七尾城の城下町と想定される山麓に、土地の人が「カンジャ畑」と呼んでいる俗称地があった。ここに能越自動車道が通ることになり、平成17年に県が発掘調査をした。その結果その俗称地からふいごや炉跡、金の付着した埴塼などが出土し、「鍛冶屋」集団がいたことが確認された。単なる俗称と思っていたものが史実を伝えていたのである。

言い伝えや土地の俗称から「七尾城」を捉えてみるのも面白い。この秋（2017年）、地元の研究団体が一般市民を対象に、ふもと地域で言い伝えの伝承地を探訪する企画を考えているという。今後官民で各エリアでのルートマップを作成し、多くの市民に足を運んでもらうのも七尾城に関心を持ってもらうきっかけとなろう。これによって、より多くの七尾城の保存・活用の新たな視点が出てくるに違いない。「言い伝え」が起爆剤になるかも知れない。



○1 【大田の観音さま】  
(重文 木造千手観音坐像(海門寺))



◎20 【立石の地藏さん】



●32 【万行の観音様】



写真9 ▲2 【ほっけ谷】  
(山の寺院群)

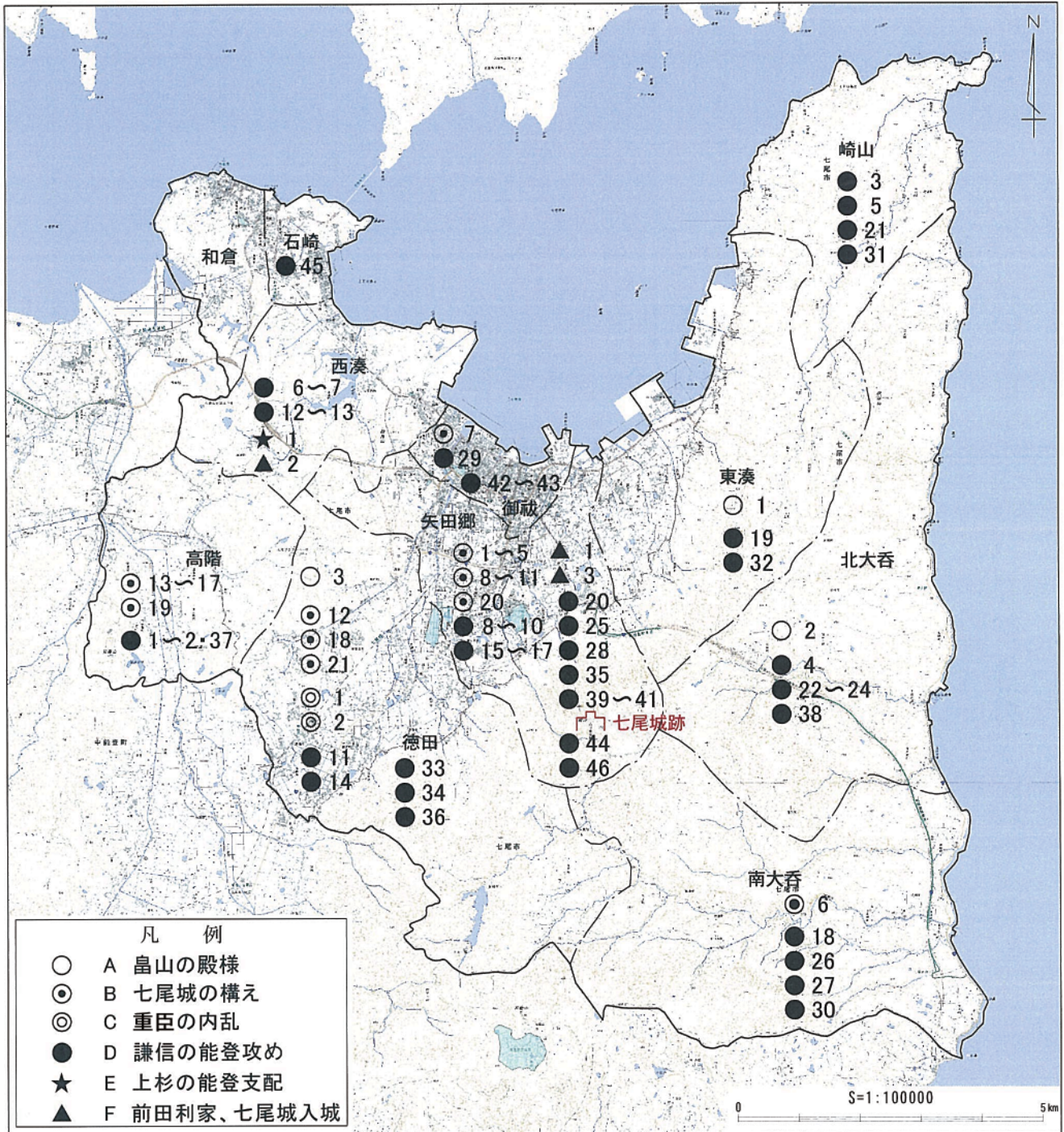


図 27 校区別伝承分布図 (旧七尾市地区)

表6 校区別伝承集計表（旧七尾市地区）

伝承		地区名	和倉	石崎	西湊	御蔵・袖ヶ江	高階	徳田	矢田郷	東湊	崎山	北大呑	南大呑
○	A	畠山の殿様											
	1	畠山の殿様						3		1		2	
●	B	七尾城の構え											
	1	本城の縄張り				7		12	1~5, 8~11				6
	2	出城、支城、砦					13~17	18					
	3	道					19	21	20				
◎	C	七尾城の構え											
	1	石塚合戦						1, 2					
●	D	謙信の能登攻め											
	1	七尾城にせまる					1, 2						
	2	謙信に抵抗する住民								3, 5	4		
	3	七尾近隣の攻防			6, 7			11	8~10				
	4	七尾城落城			12, 13	29		14	15~17, 20, 25, 28	19	21	22~24	18, 26, 27
	5	越後勢の奪略					37	33, 34, 36	35	32	31	38	30
	6	城山の怪奇	45			42, 43			39~41, 44, 46				
★	E	上杉の能登支配											
	1	二塚			1								
▲	F	前田利家、七尾城入城											
	1	前田利家、七尾城入城			2				1, 3				

表7 校区別伝承一覧表（旧七尾地区）

○ A 畠山の殿様

1 畠山の殿様

○1	【大田の観音さま】	城主尊崇の観音を乞食が盗むも身動きできず。
○2	【お茶の水】	山中の砂金付近の水が美味。殿の茶の湯に。
○3	【鷹匠の集落】	畠山の能登入国に従い、定住した集落がある。

● B 七尾城の構え

1 本城の縄張り

●1	【南門】	古府の赤坂に七尾城の南門があったという。
●2	【大門】	矢田大門に大手門があったという。
●3	【門(かど)の前】	殿様が下馬し服装を整えるため休憩したという。
●4	【百間馬場】	城山西北に土堀のある平坦地あり。馬洗い池も。
●5	【抜け穴】	袴腰の中央にあった。昭和初期にはあった。
●6	【代官道路】	城山から尾根筋に富山湾へ通じる道をいう。
●7	【西光寺の門】	西光寺の山門は、往古七尾城の門とされる。
●8	【源左衛門井戸】	屋敷跡が残る。この井戸は今も残る。
●9	【馬喰町】	俗称地。馬に関しての町があったのでは。
●10	【山図面の地名】	オヤシコと呼ぶ地は山図面では[お屋敷]とある。
●11	【八幡神社御神鏡】	落城後の慶安年間に発見され、祠を建て祀る。
●12	【荒牧】	築城の材木を切り出し、牧場にしたとも。

2 出城、支城、砦

●13	【温井氏館跡】	館山に重臣温井氏の館跡在り。
●14	【小門(こもん)口】	温井氏居城の裏門という。
●15	【腰前(こしまえ)】	館山の南側に七曲りの土塁があったが、今はなし。
●16	【松の木】	温井家の表門という。
●17	【いぼ池生水(しょうず)】	良質の湧水あり、温井家の茶の湯に。
●18	【城が峰】	古の砦跡で、地溝帯を見渡せる位置にある。

3 道

●19	【殿様道】	温井氏の七尾城登城の道という。
●20	【立石の地蔵さん】	通称「門の高」にある地蔵。城郭への主要道脇。
●21	【枅形峠】	城が見える峠で、石動山僧徒は笠をとって拝礼した。

◎ C 重臣の内乱

1 石塚合戦

◎1	【刀(たち)池】	戦死者や刀剣を埋めたので、たち池と呼ばれる。
◎2	【刀塚】	戦死者や刀を埋葬。後年掘り出すと家が揺れる。

● D 謙信の能登攻め

1 七尾城にせまる

●1	【深田に足を取られた謙信】	館山の温井氏を攻めるも周囲は深田、反撃を受ける。
●2	【白山社に兵火】	館山周辺集落の社寺が焼き払われる。

2 謙信に抵抗する住民

●3	【惣左エ門にいらまれた謙信】	八寸の大竹をひねって鉢巻きにして、敵に対峙。
●4	【熊野権現址】	権現の化身は惣左エ門なり。
●5	【一斗白の水】	水を所望の謙信に、満水の一斗白を差し出す。

3 七尾近隣の攻防

●6	【馬隠し谷】	侵攻に、七尾勢が馬とともに身を隠した。
●7	【十三塚】	中島郷の七尾城応援勢を弔った塚という。
●8	【赤坂】	俗称名。赤坂の戦さがあった。
●9	【戦場跡の話】	不幸が続く僧侶に見てもらったら赤坂の跡地と。
●10	【十三塚】	激戦地。埋葬した塚が13になった。
●11	【飯川の戦い】	畠山勢、飯川にて迎え撃つ。近くに精霊森あり。

4 七尾城落城

●12	【追い分け地藏】	牛裂きにされた稚児の丑之助を弔った地藏。
●13	【謙信のがいもん】	謙信の夜伽のお礼。長尾姓を名乗っている。
●14	【牛ざきの石】	上杉勢の動きを七尾城へ通報。露見し惨殺に。
●15	【蹴落坂】	長綱連が伏兵に馬もろとも谷に突落とされて落命。
●16	【不動滝由来】	この深い沢から敵勢を導き入れ、落城へ。
●17	【戻り橋】	白米城伝説。カラスで発覚。謙信引き返す。
●18	【馬洗い】	白米城伝説。馬洗いで誤魔化すも、鳥で発覚。
●19	【子守唄落城】	白米城伝説。子守唄から見破り、攻撃した。
●20	【片目のスズメ】	白米を食べて石を投げられ、片目のスズメに。
●21	【めおとの木】	逃げる武士が囲まれて妻と自害。2本の榎。
●22	【血の池】	落ち延びる姫を殺し財を奪う。元日、血の池が現われる。
●23	【金の鞍】	村人に姫と金の鞍を預けるも迎えがなく自害。
●24	【懐中の黄金】	逃げ落ちる姫を従者が殺し、財を奪う。
●25	【蛇池】	子女、蛇池で自害。その時雷鳴あり、白蛇昇天。
●26	【開かずの蔵】	逃げる奥方を殺し財宝を奪う。人前で蔵は開けず。
●27	【家臣が定住】	家臣が落ち延びて定住。守の名字が何軒か。
●28	【立てり】	俗称地。家来が落延びる時城を振り返った所とも。
●29	【鍵とりの家】	城中の守護神を赤間田に埋めて逃げ落ちる。

5 越後勢の略奪

●30	【火打ち石】	黒い大石を持ち去ろうとするも、動かず諦める。
●31	【お観堂】	持ち出された観音が夢枕で、連れに来てくれと。
●32	【万行の観音さま】	観音様がイケヤキに隠れ、連行を免れる。
●33	【黄金の神輿】	略奪を恐れ、神社脇の池に埋める。
●34	【江曾の観音様】	山中から光が。城内の仏を持ち出し埋めたもの。
●35	【財宝】	畠山の財宝を矢田の白土の窯跡に隠した。
●36	【底なしの池】	付近の底なし池に釣鐘を放り込んだ。
●37	【陣の穴】	越後勢来襲の折、村人が隠れた。
●38	【城穴】	4坪程あり。村人がこの穴へ避難したという。

6 城山の怪奇

●39	【西の丸】	今も山仕事には気持ちが落ち着かない。怨霊か。
●40	【元旦に戦さの声】	新年丑三つ時、蹄や刀の打合う音などがする。
●41	【おはぐろふな】	女たちが池で自害。以後、歯の黒い鮒が住む。
●42	【化け物屋敷】	新築後怪火や人影。城の古物で改築後治まる。
●43	【城山の火玉】	小雨の夜、火玉あり。城山の方へ飛んで行った。
●44	【火の玉】	月明りで稲かけ中、城内から何とも言えぬ炎が。
●45	【音を出す石】	畠山の戦死者を埋めた墓石。音が聞こえると。
●46	【おかね火】	秋の小雨、一団の怪火飛ぶ。畠山勢の亡霊かと。

★ E 上杉の能登支配

★1	【二塚】	越後勢の重臣親子の墓という。
----	------	----------------

▲ F 前田利家、七尾城入城

▲1	【しおき田】	処刑場とされ、今も祟りを恐れ入らずの森に。
▲2	【ほっけ谷】	元の城下町に在った寺院を前田氏が集めた。
▲3	【おいてけ、おいてけ】	転がっている刀や兜などを盗ると、声や火玉が…

### 第3項 社会的環境

#### 1 位置・地勢

七尾市は、日本海に突き出た能登半島の基部西側に位置し、北が穴水町、西が志賀町、南が中能登町・氷見市に接している。市域面積は、317.96 km<sup>2</sup>で、東西約 24 km、南北約 26 km にわたる。

現在の市街地は、日本海が入り込んだ天然の良港七尾南湾に面した低地に展開し、その北には半島最大の能登島が横たわっている。東は七尾城跡が築かれた城山から伊掛山に続く石動山系が連なって富山湾と七尾湾を区切っている。その対面の西は、眉丈山系が連なり、その間には、能登最大の穀倉地「邑知地溝帯」が広がっている。

七尾市は、七尾港を窓口として発展してきた地方都市であり、外洋の日本海交易と湾岸を中心とした内湾交易、更には北陸道に連絡する能登街道や奥能登へ向う奥能登街道の発着地であった。

こうした地勢により、古代に能登国府が置かれて以来、近世まで歴代の政治拠点が置かれた能登の政治・経済・文化の中心地として発展し、その伝統は今も受け継がれている。

現在は、のと里山海道や能越自動車道などの道路網、首都圏と結ぶのと里山空港や北陸新幹線などの交通網整備が進められ、東京（羽田空港）から七尾（のと里山空港経由）までは2時間圏内となっている。



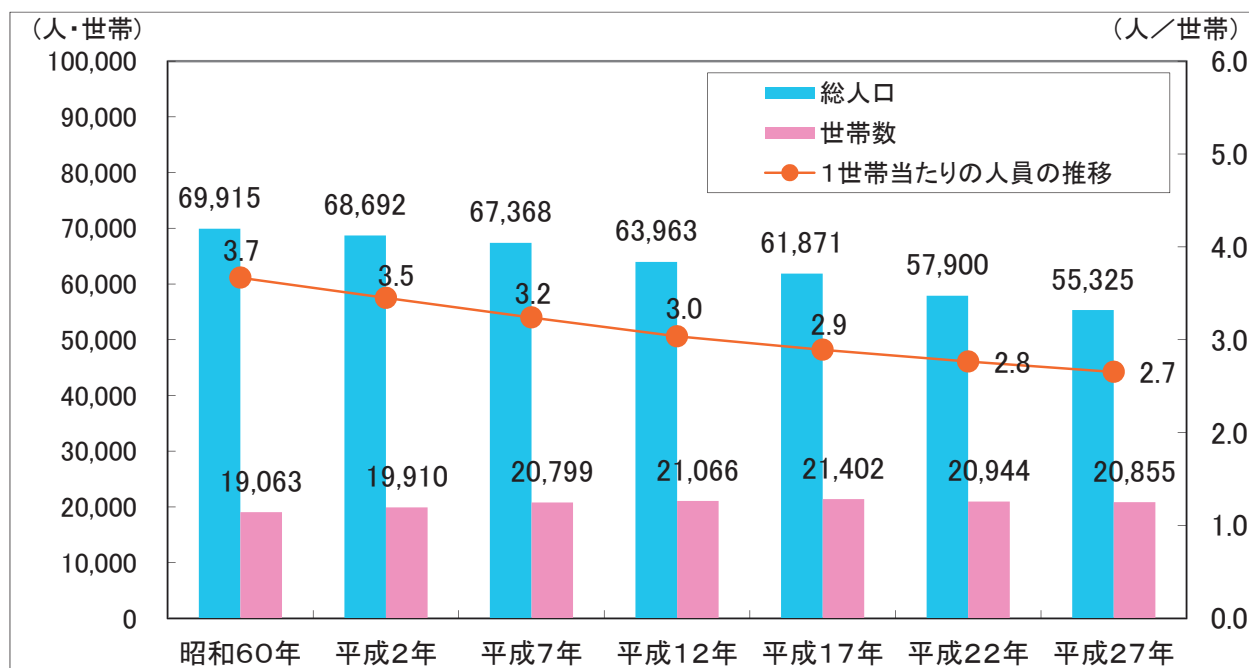
図 28 七尾市・七尾城跡の位置

## 2 人口・世帯数

本市の人口は、昭和60年の69,915人から減少しており、平成27年には、昭和60年の79.1%、55,325人となっている。世帯数については、平成7年まで緩やかな増加傾向が続くが、平成27年にはやや減少している。昭和60年には、3.7人だった1世帯当たりの人員数は、平成27年には2.7人まで低下している。

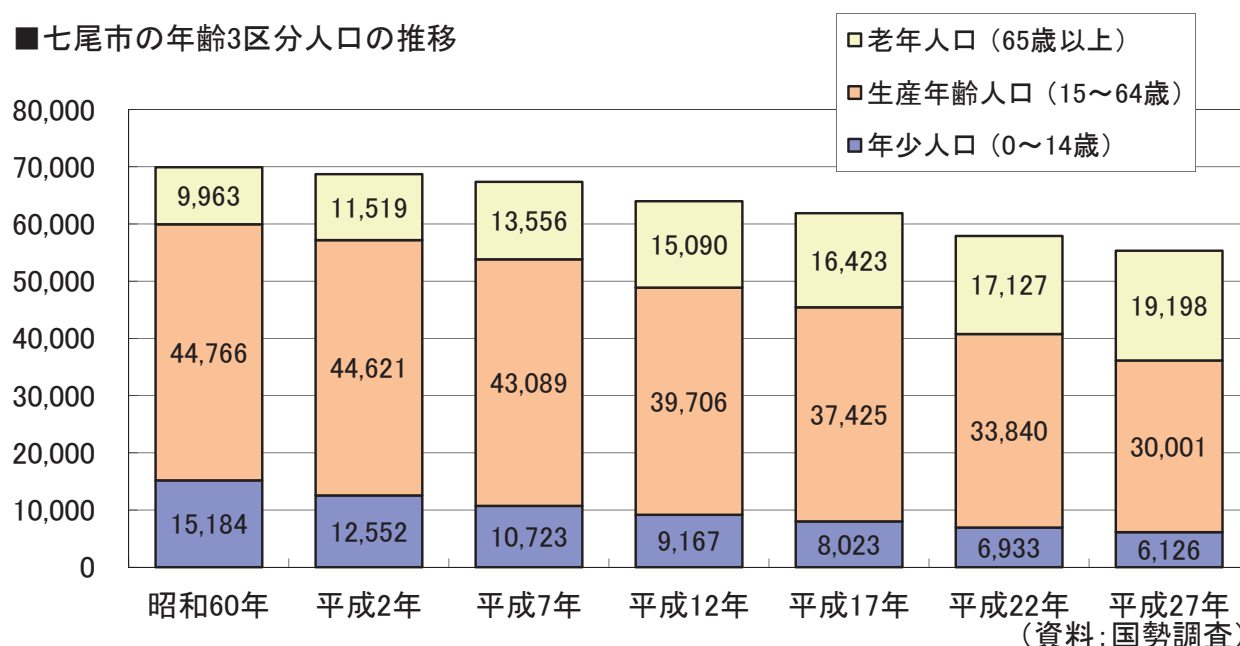
平成30年1月現在は、人口53,819人、世帯数22,212世帯である。

### ■七尾市の人口、世帯数及び世帯当たりの人員数の推移



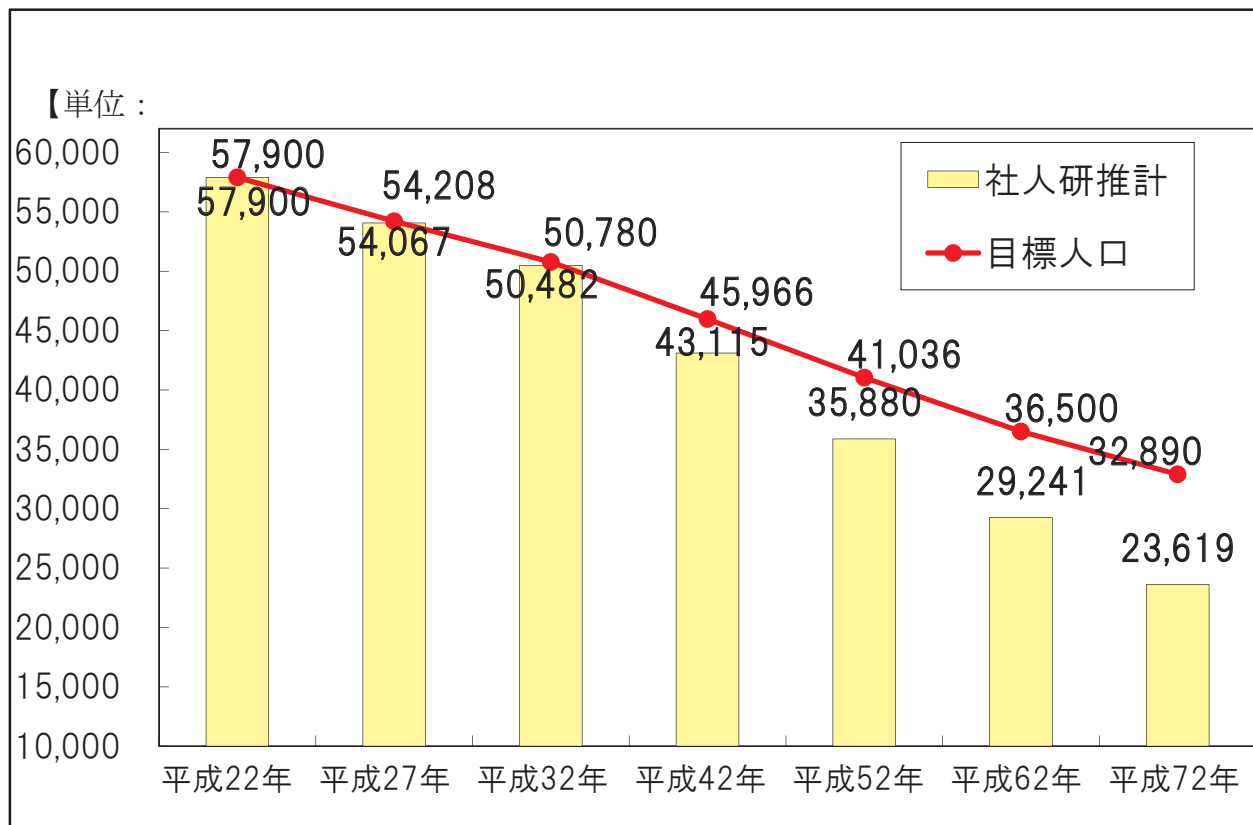
年齢区分別では、年少人口（0歳～14歳）の比率と生産年齢人口（15歳～64歳）が減少しているのに対し、老年人口（65歳以上）は増加している。

### ■七尾市の年齢3区分人口の推移



平成25年3月27日、国立社会保障・人口問題研究所（社人研）から公表された将来推計人口は、2040年（平成52年）には35,880人と、2010年（平成22年）の約6割となる。生産年齢人口（15歳～64歳）は、33,840人から16,918人に半減する。高齢者については、17,127人から2020年（平成32年、19,267人）をピークに2040年には15,671人と減少していく。

### ■将来推計人口の推移



### 3 気象・気候

七尾市の気象（1981～2010）は、年間の平均気温が13.6度、降水量2076.9mm、日照時間1542.3時間で、積雪は多いときには50～70cm程度である。

気候は、日本海側の気候であり、冬季の積雪と年間降水日数が多いことを特徴とする。

近年は、全国的に異常気象が恒常的に発生するようになっている。

集中豪雨は、毎年夏場になる

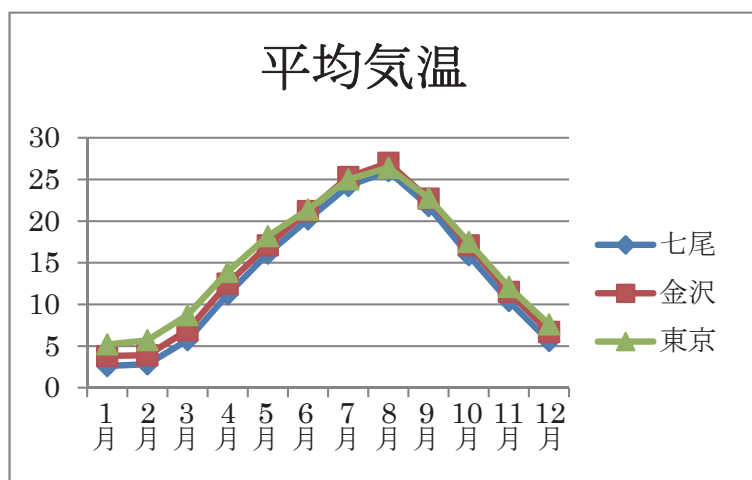


表8 平均気温表

と頻発し、ゲリラ豪雨という呼び名が定着し、さまざまな被害をもたらしている。

七尾市においても、平成29年6月30日から7月3日にかけて断続的な激しい雨が降り、7月の平均降水量(235.1mm)に迫る、降水量224.0mmを観測する異常事態となり、河川の増水や土砂崩れ、家屋への浸水、道路の冠水などのさまざまな被害とともに七尾城跡にも被害をもたらしている。



豪雨災害(九尺石西側)  
(2017.7.3)



豪雨災害(「林道城石線」)  
(2014.2.19)

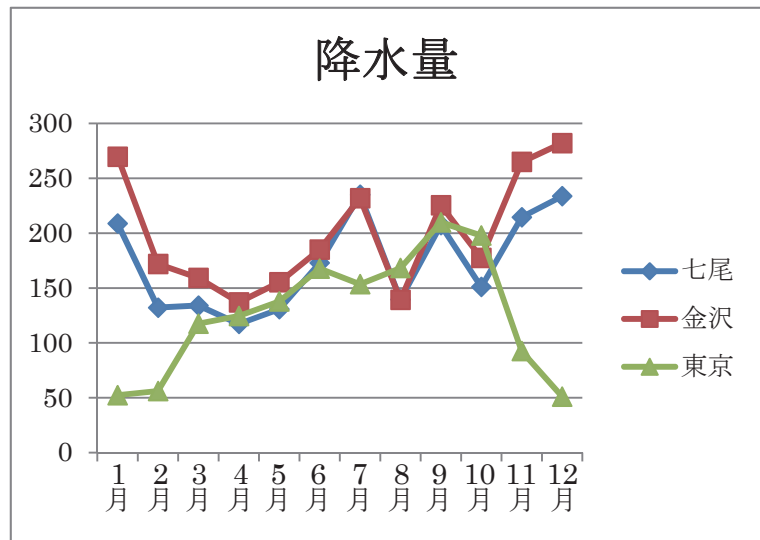


表9 平均降水量

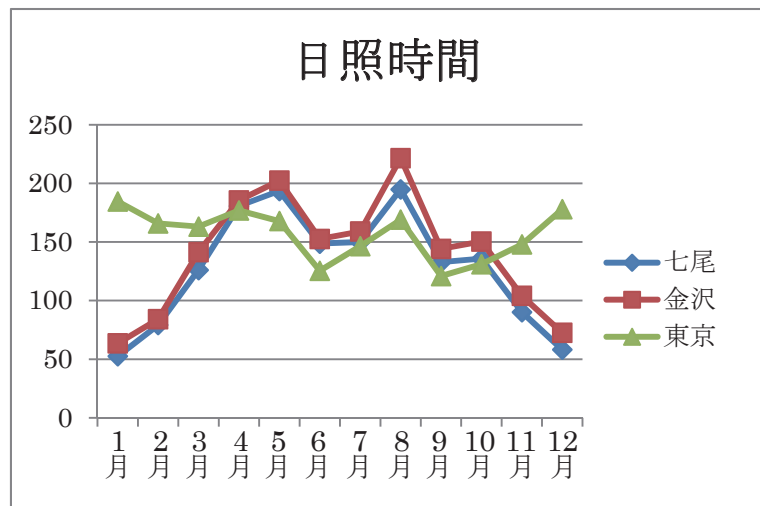


表10 平均日照時間

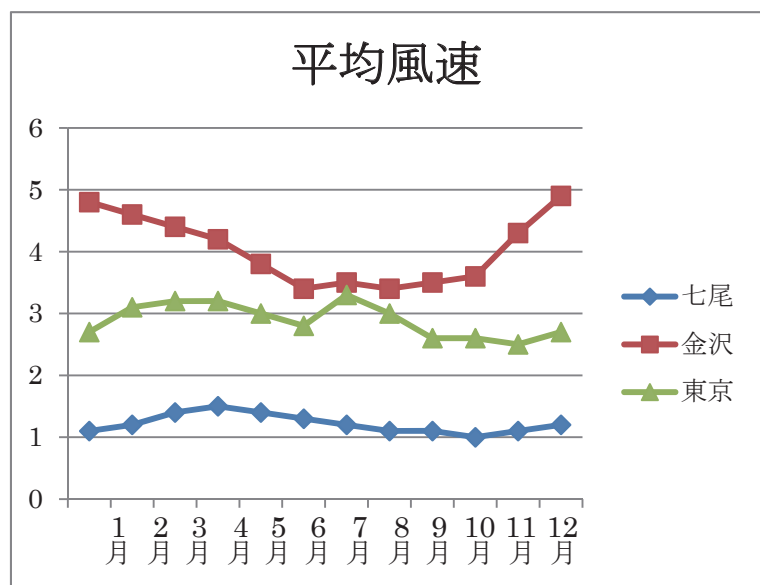


表11 平均風速